

日本放射線技術学会
造影研究会 事業報告

平成 27 年 7 月 5 日 (日)

中国・四国支部第 16 回夏季学術大会において研究会を開催したので報告する。

午前の部(消化管造影の部)

司会 JCHO 下関医療センター 村上誠一
土谷総合病院 今田直幸

パネルディスカッション (10:05~12:00)

テーマ「安全な頭低位腹臥位前壁撮影を考える」

(X 線透視撮影装置メーカーの立場から)

田中 亨先生 (東芝メディカルシステムズ (株))

(ユーザーの立場から)

パネラー

1. 鷺見 和幸 倉敷成人病センター
2. 山岡 知晴 高松平和病院
3. 品川 祐樹 広島原爆対策協議会

(内容) 本年 5 月、群馬県の検診機関において発生した胃 X 線撮影における女性受診者落下死亡事故を受け、「安全な頭低位腹臥位前壁撮影を考える」と題したパネルディスカッションを開催した。X 線透視撮影装置メーカーの立場から東芝メディカルシステムズ株式会社の田中 亨先生が装置の保有する様々な安全機構について解説した。引き続き鷺見和幸技師 (倉敷成人病センター) は頭低位角度の程度、肩当て機構の有無が被検者に与える不安感についてアンケート調査し報告した。また、胃形と撮影時の頭低位角度関係について考察した。加えて頭低位角度をより少なくする前壁枕の使用方法を紹介した。山岡知晴 (高松平和病院) は施設検診の立場から頭低位角度の現状と、薬物としてのバリウムアレルギー、発砲剤による気分不良のメカニズムを解説した。品川祐樹 (広島原爆対策協議会) は検診車ユーザーの立場から、頭低位撮影の現状、監視モニターの重要性、頭低位角度を撮影技術で補う方法を報告した。

4 名のパネラー発表の後、会場から多数の質疑があり活発な討論となった。「装置の安全機構の義務化」「施設及び撮影者の職業的倫理観」「研修会でのさらなる啓発活動」等々がキーワードとなろう。参加者数は 43 名であった。

午後の部(血管造影の部)

新技術紹介 (13:00~13:15)

司会 土谷総合病院 総合病院 今田 直幸

「清潔環境を考慮したハイブリッドオペ室用自走式血管撮影装置」

GE ヘルスケア・ジャパン株式会社 本岡 一成 先生

天井走行型は天井設置のへパフィルターによる換気を妨げたり、天井走行レール部を清潔に保つこと

が困難である。一方、床置き自走式装置は室内環境を清潔に保つことが可能でよりハイブリッド手術室に適したものとなっている、と紹介した。

パネルディスカッション（13：15～15：00）

テーマ「ハイブリッド手術室における放射線技師の役割」

司会 松山赤十字病院 水谷 宏
倉敷中央病院 大角 真司

パネラー

1. 佐野裕一 山口大学医学部附属病院
2. 野田典孝 土谷総合病院
3. 三宅浩一 心臓病センター榊原病院
4. 大野貴史 高知医療センター

（内容） 4名が各施設におけるハイブリッド手術室の現状と放射線技師の役割について発表した。カテ室との相違点、ハートチームとして他職種とのコミュニケーションの問題、OJTの問題点、放射線防護について等々、各施設から現状報告がされた。ハイブリッド手術室という比較的新しい環境下での業務に対し、施設間の違いがあるものの他職種との連携が非常に大事であることは共通認識として持てた。今後さらなる拡がり期待されるハイブリッド手術室での放射線技師の役割は専門性と多様化が求められるものと考えられた。会場からも活発な討論がされた。参加人数 44 名であった。